

42 掛川城は木造復元天守であるかの調査

筆 者 武藤 正誠

標題について、私は掛川城公園管理事務所に勤務しています武藤と申します。

掛川城は建設当時から「日本で最初の本造復元天守」であると、掛川市民は聞いておりました。ところが、最近城郭協会の判断は、文化庁の区別基準に従い、掛川城は「復興天守」に変更をしたとの事でありました。

掛川城を愛する一市民としては、寝耳に水で納得がいかない事であります。

従いまして、掛川城は「復元天守」であるか「復興天守」であるかの、調査をいたしましたので、下記に記述いたします。

まず、お城の成り立ちについて説明いたします。平安・鎌倉・室町時代の武家社会におきましては、お堀や塀に囲まれた館（環濠集落）がお城でありました。例えば武田館（躑躅ヶ崎）・駿府今川館が有名です。当時のお城は攻防戦で籠城するには適さないため「詰の城」と言われる、お城を備えていました。武田館には要害山城、駿府今川館には賤機山城がありました。平時は館で生活・政治を行なっておりますが、いざ戦争となると「詰め城」に籠り領地を護ったのであります。

織豊時代になり、織田信長が岐阜城の様な「御殿」と、「天守」と呼ぶ一帯形のお城を造ったのです。学者先生によりますと、御殿と天守の揃ったお城は、日本に三百から四百はあったと言われています。それが、落雷・地震・一国一城令・廃城令、そして第二次世界大戦により焼失してしまいました。現在では犬山城や高知城の様な現存天守は12城残っています。しかし現存の御殿は四つしか残っていません。埼玉県の川越城、高知城、そして国宝の二条城であります。二条城は1700年代に落雷により、天守が消滅してしまいましたが、その後再建はされませんでした。よって、天守と御殿が現存しているのは、高知城だけです。

掛川城は平成5年に木造復元した天守がありますので、天守と御殿をお城として観る事ができるものなのです。

では、掛川城の歴史を説明いたします。掛川古城が築城されたのは1500年頃、掛川は斯波氏と今川氏の勢力争いの境界位置であり、斯波氏の勢力内でありました。北条早雲（伊勢新九郎）が今川氏親（義元の父）を擁護して、斯波氏の配下である、原氏（殿谷城）を攻める時に、天守から東に400mの位置にある、天王山に築城（陣城）したのが始まりであると考えます。1512年、現在の龍頭山に今川家の勢力拡大に伴い、朝比奈泰能（やすよし）が築城しました。天守は無く館でありました。1560年に桶狭間で義元が討たれる。1569年、家康と氏真の掛川城攻防戦の後、徳川領となりました。そして、1590年、小田原征伐に伴い、家康が関東移付されたことにより、駿府城に中村氏、掛川城に山内一豊（やまうち・かつとよ）、浜松城に堀尾氏と順次移封されました。江戸に居る家康が大阪の秀吉を攻めてこない様に築城されました。よって、初めて掛川城に天守が築かれたものです。縄張りは惣構で、町人街、武家屋敷を掘りの中に囲い、農地と区別した構えです。掘りは農地と区別した境掘りとも言われる惣掘りそして外堀り・中の掘り（蓮池）・内堀り（三日

月掘り・十露盤掘り)を施して天守を護っていました。城郭は渦郭梯式で、天守丸・腰曲輪・本丸・中の丸・松尾曲輪・二の丸・三の丸そして、下台所曲輪(大日本報徳社付近)・山下曲輪(掛川第一小学校付近)・大手曲輪と整備されて行きました。

10年後に一豊は高知に移封されて行くのですが、天守は地震により崩壊します。1707年の宝永地震でも崩壊するのですが、その都度修築されました。しかし、嘉永7年(1854)の安政地震では崩壊したまま放置され、明治には喪失してしまいました。

それでは、平成5年、140年ぶりに、日本で最初の本造復元城として、再建された天守の構造を説明します。付け櫓の有る複合式天守、張り出し低屋の上に物見の塔を載せた望楼型天守、武者隠しを施した三層(重)四階、天守最上階には織豊時代の高欄・廻縁を施しています。城壁は白漆喰惣塗り籠めの全体が白いお城です。防備としては、石落とし・忍び返し・狭間を施しています。

以上が掛川城の概要説明であります。

では、本題であります。掛川城は「復元天守」か「復興天守」かの説明に入ります。令和3年(2021)に文化庁が区別した基準を説明します。

「復元天守」とは、かつて天守があった場所に古写真や、図面をもとに伝統工法で原形に復する、元に復した建造物である事

「復興天守」とはかつて天守が存在していたが、写真や図面がなく、こうであろうと想定して再築した建造物である事

と分けられたことから、城郭協会は掛川城を「復興天守」であると判断したものであります。

私としては、27年前の建設当時「日本で最初の本造復元天守」を建設しようとした、市長(榛村氏)と学者先生、高額寄進をして頂いた白木女史、そして瓦一枚・柱一本と寄付をした多くの市民は、今更歴史的根拠が無く、コンクリート造と同等であるとされる「復興天守」では納得いかないと思います。

参考ではありますが、年代により「復元天守」・「外観復元天守」・「復興天守」・「復古式天守」の判断基準に相違がありますので説明します。

「復元天守」とは

1997年 図面や古写真から元通りに建てたなおされた天守を呼び、外観のみでも旧天守に近ければ、外観復元と総称されている。

2018年 天守が現存した当時の図面や文書記録、遺構などに基づき、当時使われていた建材、構法、工法によって忠実に復元したもの、再建に当たっては様々な法律の規制がある。(本造復元天守)

2021年 かつて天守があった場所に古写真や図面をもとに伝統工法で原形に復する、元に復した建造物

「外観復元天守」とは

1997年 復元天守に含まれていた。

2018年 鉄筋コンクリートなどで構造を造り、外観だけを往時のように再現したもので、戦後から平成初期にかけて復元された天守が多い。展示室を設けて博物館として利用されている事が多い。

2021年 文化庁が令和2年（2020）に新基準「復元的」を新設しました。

城郭協会によると、掛川城はこれにあてはまるかもしれないが、申請と承認が必要としている。

「復興天守」とは

1997年 外観や規模が不明でも、実在した場所に建てられたり、外観を変造して変造して建てられた天守を呼ぶ

2018年 かつて天守が建てられていたが、史料不足によりその規模や意匠に推定部分があり、外観を正確に復元していないもの、また規模、意匠を再建時に改変してしまった天守である。

2021年 かつて天守が存在していたが、写真や図面がなく、こうであろうと想定して再築した建造物

「復古式天守」とは

1997年 再建された天守が、創築当初の様式で築かれたものを呼ぶ、層塔型天守最盛期にあえて望楼型天守にする場合も同様である。部分的に下見板張りや回縁・高欄を採用するケースも復古の一例である。

それでは、昭和63年当時の建設に関わった役員を調べてみました。

建設当時の組織及び役員

復元工事設計・管理 竹林舎建築研究所 代表 宮上茂隆（東京都文京区）

工事施工者 鹿島建設株式会社 横浜支店 （神奈川県横浜市）

掛川城天守閣復元調査委員会

若林淳之 （掛川市史執筆委員会委員長） ※復元城として建設した。

宮上茂隆 （復元工事設計・管理責任者 工学博士） ※復元城として建設した

小和田哲夫（掛川市史執筆委員 静岡大学教授） ※復元城と判断している

粕谷重範 （掛川市文化財保護審議会委員 掛川地方史研究会）

関 七郎 （掛川地方史研究会） ※復元城と判断している

榛村純一 （掛川市長） ※日本最初の本造復元城を求めている

仁科雅夫 （掛川市議会議長 掛川観光協会会長 掛川商工会議所副会頭）

立石 弘 （掛川城御殿管理人）

建設当初の各種資料において「復元天守」なのか「復興天守」であるか、隔たりがあったのか調査してみました。

○昭和63年（1988）掛川城建設委員会が結成された当時

1）寄付金に関わる「寄進のお願い」パンフレット文書

瓦・・・一口 5千円（ 口）

石垣・・・一口 3万円 (口)

木材・・・一口 5万円 (口)

とあり

寄進して頂いた方には竣功後・・・(中略)・・・「ご芳名を記載した掛川城天守閣復元調査報告書」と、「登城券」を贈呈いたします。

と明記されていた。

2) 「掛川城天守閣復元事業資料・掛川城天守を本格木造で復元する価値・宮上茂隆」

※宮上茂隆氏は工学博士で掛川城天守閣設計者であります。

宮上氏は「掛川城天守については正確な復元ができる」と明言しております。

宮上氏は天守復元の資料について

①「御天守台石垣芝土手崩所図」嘉永4年(1851)

②「遠江国掛川城地震之節損所覚図」嘉永7年(安政元年 1854)

③「正保城絵図」正保元年(1644)

④「高知城の築城に関する記録・御城築記」

一豊の「天守は掛川の通り」との指示記録がある。

⑤一豊が創建した高知城は享保12年(1727)に焼失したが再建され残っている。

上記資料により、宮上氏は「復元的研究を行い掛川城天守の復元について、正確な判断を下せるのである」としています。

3) 榛村市長レポート No.275 「わが国最初の本格復元天守」

宮上教授と研究調査委員会は掛川城天守閣は木造本格復元する史料が多く価値は高いとしています。

まず、学術的・歴史文化的価値は三点に要約される。

第一点は学問的に一等史料に基づく復元ができる天守閣は少ないが、掛川城天守閣はできるということである。一等史料とは、江戸時代の「山内一豊公築城記」と二枚の江戸城差出しの「掛川城絵図面」そして一豊掛川城を模した原高知城があること。一豊時代の「野づら積み石垣」を残す天守台が現存することである。

第二は掛川城天守が慶長元年(1596)建立で現在最古の松本城古天守の次に古いこと、聚楽第の白漆喰総塗り籠め天守の最古の実例となること。

第三は木造天守建築の工法・技術・職人芸の伝承普及とその映像化の価値が大きいことである。

○平成6年(1994)天守閣の完成

1) 完成時の記念冊子 「ひとの鼓動が聴こえる・・・掛川城天守閣復元事業記念誌・・・」

「関係各位のごあいさつ」のお言葉

榛村純一(掛川市長)

私にとって天守閣復元話は・・・昭和41年の市長・・・天守閣建設奉賀帳の記帳を頼まれた時に始まった・・・

草賀文雄（掛川城天守閣建設推進委員長）

この掛川城天守閣の復元事業は市民を始め多くの皆様の浄財・・・

太田松子（太田家18代当主）

ここに掛川城天守閣復元工事が始まり・・・建築学的にも又資料としても珍しい木造天守閣復元工事の重要性が感じられます・・・

2)「日本300名城 著者 豊田慶造

（遠州トラック管理課長・城郭研究家・袋井市在住）」

我が郷土掛川市に・・・（中略）・・・日本で最初の本格的木造復元天守閣ができる。明治以降初めての木造建築城郭で・・・（中略）・・・建築できた背景には、当時の設計図が保存されていたこと、町に史家が居たことである。・・・（中略）・・・本格的城郭再建に真剣に望んだ掛川市長（榛村純一）が在任していた為であろう。

○平成14年（2004）の著書

1)「城郭・陣屋・・・辞典 西ヶ谷恭弘（編集） 日本城郭史学会」

近年、一市民の寄付がきっかけで天守復元事業が始まり、発掘調査が行われた。・・・

・・・（中略）・・・本丸を囲む多様な掘りなど詳細掛川城史を知る成果が得られ、平成六年に一豊時代の天守が完成した。

調査の結果掛川城建設当時の資料には全て「復元天守」としており、「復興天守」「外観復元天守」「復古式天守」の考えかは全く有りませんでした。

掛川市中央図書館が所蔵している「掛川城に関わる図書」は拾数冊有りましたが、殆どの著書は「復元天守」又は「復元城」としておりました。

しかし、掛川城は「復元天守」では無いとしている著書が有りました。

1)「執筆者 加藤理文 織豊基城郭研究会 1997年」

掛川城は山内時代で他の豊臣天守と同様に下見板張りの黒い天守であった可能性が非常に高い。幕末時代になると高欄と回縁は外壁で取り囲まれて、二層目・最上階が下見板張りに戻されている。（一豊は1590年代で白漆喰の天守は1600年以降）

平成6年、木造で復興された天守である。・・・現存する高知城天守の意匠を数多く取り入れた姿で、山内時代と言うより江戸時代後期の復古式天守の体裁である。

初層入母屋屋根が小さく、外観の均衡を保つ姿の望楼型天守としたため、内部に矛盾が大きい。一階の建ちが極端に高く、そのしわ寄せが屋根裏階という、中途半端な階に現れられている。

2)「執筆者 木戸雅寿 織豊基城郭研究会 1997年」

天守復元に先立ち、天守台が平成5年に発掘調査がされた。その結果、一豊時代の石垣が発見されたが復元天守建設に伴って埋められてしまった。また、発掘調査の成果は一豊段階の天守復元をうたっているにもかかわらず、その成果は活用されていない。

3)「日本の城・天守閣（廣済堂出版 2018年）」

「掛川城は平成6年に掛川市民や地元企業の協力により、戦後初となる木造で天守復元が行われた」とあるが「一豊が築城した高知城天守を参考に、資料が残されていない初代天守を再建したため「復興天守」とされることもある」としています。

4) 城郭研究家の千田嘉博氏（城郭考古学者・奈良大学教授）は最近の著書において、「掛川城は復元天守としては問題が有る」と執筆しています。（NHK等に出演）

<総括>

現在の掛川城について一般的な図書は「復元天守」又は「復元城」とされています。しかし、一部の城郭専門家は、一豊の初代天守閣を復元したと掛川市が主張しているが、文献・古絵図には該当せず、松平（久松）定綱が修繕した城であり、「復古式天守」で回縁・高欄を付けた白漆喰総塗り籠め城で、関ヶ原合戦の慶長5年（1600）以降の高知城を写している。1644年の正保城絵図を基本根拠として復元しているが、嘉永4年（1851）そして安政元年（1854）の地震により崩れ喪失してしまった城を「復興」したと思われるので「復興天守または復古式天守」ではないかと主張しております。

掛川市としては、昭和63年の掛川城復元工事立ち上げ当時から「日本で最初に認められた木造復元天守」としていますので、「復元天守」と言い切る事が肝要であると思います。

令和3年に城郭協会が「城郭カード」を販売することになり、掛川城は「復興天守であり、再建に当たり山内一豊が建てた城の根拠は無い」とされました。再三「復元城」であると抗議いたしましたが、最終的に「木造再建城であるが山内一豊が建てた城の根拠は無い」として発行されてしまいました。

掛川城は天守内部が「想定復元」でありますので、完全な「復元天守」では無いと思われます。しかし、復元工事発足時期昭和63年（1994）当時は、外見復元は「復元天守」に含まれていましたので、「復元天守」が良いと思います。

もし、「復興天守」の語句が明記されている配付物（パンフレット・リーフレット等）が広まると、何れ掛川城は歴史的根拠の無かった「復興天守」とであるとされ、日本で唯一価値の有る「復元天守」と一般的に認知される事は困難になると思います。

掛川市の関係各所におきまして「掛川城は建設当時から”復元天守”であった」との証明ができる建設資料（届出資料等）を確認して頂く事をお願いしたいと思います。

今後、掛川城を文化財登録して行く手段といたしまして、天守復元調査委員会の発足当時に、14人の委員で具体的な復元作業を行ったとしており、建築史の立場から宮上茂隆

氏。文献史学の立場から若林淳之氏・小和田哲夫氏らが調査・研究。市長・市議会議員ら市役所関係者は国や県の関係部局との協議を行った事により、調査・研究の結果「天守復元」の資料が明らかになったとしており、文化財的な価値を認めたとしております。四半世紀が過ぎ、数年後には建設30周年の祝典を迎える時期となります。

平成30年（2018）の「掛川市歴史的風致維持向上計画」に形成建造物の指定候補として「掛川城天守」が含まれております。掛川城を愛する一市民としては、半世紀後には市の指定文化財となり、行く末には県、そして国の文化財となっていく事を望んでいます。その為には市の観光振興として「日本で初めての木造復元天守」であると主張して、観光宣伝を行い保存して行かなければならないと思います。

<調査に使用した文献>

図 録	掛川城概説	著者	関 七郎
	掛川市の神社・寺院めぐり	著者	関 七郎
	掛川城ガイドマニュアル	作成	掛川教育委員会 社会教育課
	掛川城と周辺のガイドブック	作成	観光ボランティアガイドの会
	掛川城ガイドの参考資料	作成	帯金 徹雄
	掛川城の復元に関わる文献		掛川市立中央図書館の各種所蔵文献を参照

資料作成者 掛川市亀の甲1丁目7番7号
掛川城公園管理職員 武藤 正誠